SHALOM-NETWORK

発行：NPO 法人シャローム事務局

〒960-1241 福島県福島市松川町字東原 17-3　Web　http://www.nposhalom.net　発行責任者：大竹静子
TEL ／ FAX　024-567-5322　E-mail　info@nposhalom.net

2016 ひまわり感謝祭 盛会のうちに終了！

終了報告 -分かち合い、いのちかがやいて-

今年も残すところ後わずかとなりました。シャロームの一年間の活動を締めくくる「二〇一六ひまわり感謝祭＆共に生きる仲間たちのコンサート」も十二月十日（土）盛会のうちに終了することができました。多くのみなさんのご支援・ご協力に感謝いたします。

当日の様子を順を追って紹介し報告させていただきます。

◆9：00～
ボランティアさんと準備開始

十日九時、AOZの開場とともに入口で待っていたボランティアや参加団体のメンバーが受付に殺到、十時からの開始に向けて活動開始です。一般受付と学生ボランティアに分かれ手際よく受付を終了すると代表からの挨拶、全体の説明、それぞれの担当責任者からのレクチャーを受け持ち場についていきました。

◆10：00～感謝祭スタート

十時までに展示等も無事完了、本番です。

展示販売コーナーは会場の中心にある交流広場とこれに隣接する大活動室1に置かれ、県内外から参加した市民活動団体、NPOの活動紹介、授産施設の展示即売などが行われました。

ふくしま飛行協会の航空イベントの映像、大玉村と友好都市となったマチュピチュの写真展、星の村天文台の隕石、会場いっぱいに漂うルワンダコーヒーの香り、初搾りのひまわり油「みんなの手」と焼きたてパン、奈良から「たんぽぽの家」の参加、等々話題がいっぱいのコーナーとなりました。「ひまわりプロジェクト」参加団体の活動紹介展示は、九州から北海道まで日本全国からの報告で溢れました。

◆10：00～12：00
地域間交流フォーラム

十時からは、多目的ホール内では午後から開始されるコンサートに向けてのリハーサル。小活動室1・2では「ひまわりプロジェクト地域間交流フォーラム―福島から繋ぐ人権Part II」が始まりました。

基調講演の講師には、NPO法人抱撲理事長でホームレス支援全国ネットワーク共同代表を務める奥田知志氏をお招きしました。「『助けて』と言える社会へ」というテーマで講演され、「経済的困窮と社会的孤立が、不安定社会を出現させ、貧困の世代間の連鎖は貧困のスパイラルに陥らせる。自分はこの世の中、社会にとってなくてはならない存在だという自己有用感が社会的孤立から救い出す。このためには『助けて』と言える社会にならなければならない。」と訴えました。

講演の後は会場のみなさんとともに座談会の開始です。座談会のゲストには、宮城県の山元町で「NPO法人ポラリス」代表の田口ひろみさんをお招きしました。山元町は海に面する福島県と隣接する町で、津波で大きな被害を受けた所です。震災の中から障

（2面へ続く）

▶地域間フォーラム・奥田氏による基調講演

愛のメモ帳

年の瀬を迎え、一年間の大河ドラマも最終回を終えた。「真田丸」真田一族が戦国の世を生き抜く姿を真田昌幸・真田幸村・真田大助三代を通して描いている。幸村は、真田十勇士などとしてあまりにも有名な悲劇の戦国武将である。

弱小の地方豪族が、戦国の世に翻弄されながらも、必死になって生きることをあきらめない。その生きようとする執念が新たな道を開く。そこには、個人を超えた真田一族の生き残りをかけた選択があった。家康の強大化した力に押しつぶされようとする豊臣の姿は、弱小の地方豪族としての悲哀を受けてきた自らの姿に重なったのかもしれない。

個人の命を次の世代に繋ぎ、一族の生きた証を繋いでいく。そのために可能な限りの手を尽くす。親兄弟も敵味方に分かれ、敵の大名との婚姻を結ぶ。人の間の不信感を煽り、裏切りや調略を繰り返す。戦いは新たな戦いを生む。

命の大切さを知り、次の世代に恥じない生きざまを示すことで、幸村はその名を後世に残し、戦いの連鎖を断ち切った。戦いの禍根を立ち、ともに滅んだことで、幸村は平和な徳川時代の英雄となった。

今年一年間を振り返りつつ、これからの世代に恥じない生き方をしたいと思う。（T・O）